

オギュスト・クフェルとプロレタリア・ ポジティヴィスム

——救世主としてのプロレタリア——

清 水 克 洋

目 次

はじめに

第1節 プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルとその思想

第2節 A. クフェルとプロレタリア・ポジティヴィスム

第3節 救世主としての労働者——A. クフェルのプロレタリア・
ポジティヴィスム

おわりに

はじめに

フランス初期労働組合運動における改良主義的潮流の中心的指導者オギュスト・クフェルはプロレタリア・ポジティヴィスムを標榜していた。クフェルの書籍労連、C.G.T.、労働高等審議会等における活動を跡づけ、彼が掲げた改良主義を理解する上で、当時のプロレタリア・ポジティヴィスムがいかなるものであり、クフェルがそれとどのようにかかわっていたのかの解明は不可欠である。この検討は、また、労働運動における革命主義と改良主義という2つの潮流の役割の再検討という今日的課題への取り組みに貢献しうるものである。

すでに見たように、クフェルの同時代人M. アルメルは、クフェルが、

労働者の組織を「ポジティヴィスムのようなつまらなく、あいまいで、時代遅れの理念に従属」させたとして厳しく批判した。これに対して、クフェルの後任書籍労連書記長リオションは、クフェルが「労連の仕事を宗教への勧誘の手段とは考えず、彼の寛容な精神と自由主義は、組合組織のために、教義のセクト主義の危険を免れることを可能にした」として、ポジティヴィスムとクフェルの組合活動を切り離した。後に書籍労連とクフェルについて研究した M. レベリユーは、書籍労働者世界の伝統がクフェルのポジティヴィスムと合致したとの興味深い指摘を行っている。三者三様のこれらの指摘は、クフェルとポジティヴィスムの関連を考える重要な手掛かりを提供する^{1), 2)}。

E. ビルク, I. モレ・レスピネは、プロレタリア・ポジティヴィストの活動を検討し、プロレタリア・ポジティヴィスムの内容について注目すべき示唆を与えている³⁾。しかし、プロレタリア・ポジティヴィスムが一貫した、体系性を持つ思想であるのか否かは問題にされず、そのような意味で、全体像を解明しているとは言えない。また、プロレタリア・ポジティヴィスムとクフェルの関係を全面的に明らかにしてはいない。本稿では二

1) Mauris HARMEL, AUGUSTE KEUFER. *Les Hommes du Jour*. 27 Août 1910. No. 136. Liochon, La Mort de Keufer. *L'Imprimerie Française*. No. 91. 16 avril 1924. Madeleine REBERIOUX, *Les ouvriers du livre et leur fédération. Un centenaire 1881-1981*, 1981. p. 106.

2) 拙稿「オギュスト・クフェル考序説」『商学論纂』第57巻第1・2号, 2015年参照。

3) Françoise Birck, Le Positivisme ouvrier et la question du travail. *Histoire de l'Office du Travail*. dir. J. Lucciani. 1992. pp. 51-80. Isabelle Lespinet-Moret, *L'Office du travail 1891-1914. La République et la réforme sociale*. 2007. すでに見たように、M. レベリユーもまた、クフェルの思想について、重要な指摘をしている。ただし、彼女もプロレタリア・ポジティヴィスムの全体像を与えているわけではない。

人の研究を整理した上で、以下の資料を検討する。まず、パリ・コンミュン後の労働運動の再生を告げる1876年パリ労働者大会にかかわる、ラポルト、マニャン、フィナンスの報告⁴⁾。プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルの考え方を当面する課題に即して展開するものである。第2に、クフェルが直接かかわっている、連名で出された2つの文書、退職金庫に関する議会委員会への1880年の回答⁵⁾、1884年のパリ市会選挙にあたってのプロレタリア・ポジティヴィスト・サークルの宣言⁶⁾と1891年にクフェルが、マルセイユの書籍労働者祭において、書籍労連の代表として行ったスピーチである⁷⁾。これらは、その内容とともに、クフェルのプロレタリア・ポジティヴィスムに対する一貫した態度を明らかにするものとして貴重である。第3に、クフェル自身によるプロレタリア・ポジティヴィスムの全面的展開、1914年に国際ポジティヴィスト協会でのスピーチである⁸⁾。

4) *Le positivisme au congrès ouvrier. Discours des citoyens Laporte, Magnin et Finace*, 1877.

5) E. Laporte, I. Finace, A. Keufer, Des caisses de retraite pour les vieux ouvriers. Réponse du cercle de prolétaires positivistes de Paris au questionnaire dressé par la commission parelementaire, 1880.

6) A. Keufer, E. Machy, Saint-Dominique, Elections municipales du 4 Mai à 1884. Les Prolétaires Positivistes de Paris. なお、クフェルは、1880年にプロレタリア・ポジティヴィスト・サークルの代表となっているが、上の1880年の文書では、I. フィナンスが代表、E. ラポルトが書記、クフェルは会計とされている。代表交代直前のものと考えられる。

7) *Compte rendue de la Fête des travailleurs du Livre de 1891. Conférence syndicale par Auguste Keufer.*

8) A. Keufer, *Fête de la Providence générale. Le Proletariat. Discours prononcée le 21 juin 1914, au siège de la Société Positiviste internationale.*

第1節 プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルと その思想

我々は、F. ビルクらにならって、プロレタリア・ポジティヴィズムを A. コントの影響を受けた労働者サークルに属する人々の思想と限定する⁹⁾。ビルクによると、それは以下のような成立経過をたどった。出発点は、A. コントが、1848年革命の結果、彼の願う制度の到来は、「プロレタリア」の支持なしでは起こりえないとの確信を持ち、哲学者とプロレタリアの同盟を構想し、そのためには、プロレタリアの道徳的、知的能力の発展が必要であるとして、その体系的教育のプログラムを生み出したことにある。その後、コントが保守主義者たちとの同盟のシステムを考えたので、このイニシャチブは急速に忘れられたが、彼の「正当」な後継者たちは労働者階級とのこの結びつきを維持し、発展させることを選んだ。その中心は、P. ラフィットと F. マニャンであった¹⁰⁾。

パリに設立されたプロレタリア・ポジティヴィスト・サークルの最初の代表は、A. コントの近い弟子、指物工 F. マニャン¹¹⁾であった。マニャン

9) F. ビルクによると、科学的方法をよりどころにする人々を結びつける一種の知的雰囲気とみなされるならば、19世紀末にポジティヴィストであることは特殊なことではなかった。また、ポジティヴィストの資格を A. コントの思想をよりどころにする人々に限定しても、彼の教義の曖昧さから、その後継者の間では極めて矛盾した適用が生じた。ある人々は社会の維持に、他の人々は社会主義の前線に向かった。労働者ポジティヴィズムは、この後者の流れに位置したが、それも極めて雑多であり、そこには、ガンベッタ、J. フェリー、J. ロッシュなどの政治家やデュルケムなどの科学者が含まれていた。Cf. F. Birck, *op. cit.* pp. 54-55.

10) F. Birck, *op. cit.* p. 55. ビルクに依拠した I. モレ・レスピネの叙述も参照。Cf. I. Lespinet-Moret, *L'Office du travail. op. cit.* p. 92.

11) F. マニャンは、メトロン辞典によると、1843年からコントの影響下であり、労働者の一番弟子、遺言執行人とされる。プロレタリア・ポジティヴィ

の時代には、このサークルはもっぱら手工的労働者から構成されていた¹²⁾。このサークルに集まった労働者は、「工業組織と、その他の人間の活動分野との関連の研究」に専門化されることとなった。彼らは、同時に、労働者階級の中に、この教義を普及し、政治生活に参加しなければならなかった。加盟は、長いイニシエーションによって準備され、その間に志願者は、ポジティヴィスト協会のメンバーによってなされる講座に通った。しばしば、ラフィットの指導下で、彼らは、A. コントの百科全書的プログラムによって構想された様々な領域に取り掛かり、また、彼の著作を読んだ。最終的な加盟は数年後でしかなく、このように長い期間は、極めて熟練しており、安定した雇用に恵まれている労働者の小さな集団とかかわっていた¹³⁾。

上の活動領域と方法は、I. フィナンスが代表する次の世代によって尊重された。硬直化や、セクト的後退のリスクが存在したが、時々の論争に参加することによって回避された。サークルの活動が再開された1885年には、事務職員の加入が認められるとともに、名誉会員が受け入れられた。その中に、パリ市議員でフリー・メーソンであるG. ロビネや、商工大臣J. ロッシュの部下F. デュビッソンの兄である医師デュビッソン博士などがいた¹⁴⁾。

スト・サークルの設立者、コントの遺言で、パリ・ポジティヴィスト協会の終身代表。1884年没。葬儀に際しては、I. フィナンスがパリ・ポジティヴィスト協会を、A. クフェルがプロレタリア・ポジティヴィスト・サークルを代表して弔辞を述べた。J. Maitron, *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français, Troisième partie, Tome X III*, 1975. pp. 327-328.

12) 1870年の規約の5名の署名者の中には、1金メッキ工、1彫刻工、1ブラシ工、2機械工がいる。例えば、A. クフェルが受けたレッスンは1871年にさかのぼり、彼は1880年にこのサークルに加盟した。Cf. F. Birck, op. cit. p. 56.

13) Cf. F. Birck, op. cit. pp. 55-56.

このサークルは、いくつかの地方に支部を持ち、外国の同種組織と連絡を保ったが、50人以上の加盟者を集めることはなかった。その言葉、分析、とりわけ機能の方法は、フランスの労働運動の伝統にあまりにも疎遠であった。ただし、このサークルは第1インターナショナルの設立に加わり、コンミュン後のいくつかの労働者大会に代表を派遣し、フランスの労働運動において積極的に活動した。このサークルは、1890年代に、労働者の新たな代表様式を生み出すことに貢献する様々な運動と結びつく省察や、提案のグループとして機能した。フィナンスとクフェルはその第一線で役割を果たした¹⁵⁾。

I. モレ・レスピネによると、1891年設立時の労働局の最初のチームの4分の1、16人中4人をポジティヴィストが占めた。この選抜は、時の商工大臣J. ロッシュと初代労働局長J. ラックスへのデュビュッソン兄弟の要請によるものであった。エコノミー・ソシアル部の長と副長、I. フィナンスとJ. ジャノル、常勤職員、Dr. クレマンとE. コラ¹⁶⁾は労働局の中で、戦略的存在となった。労働局はポジティヴィストの砦であり、そこには、科学者、労働者、官僚、技師の一種のフリー・メーソンが見出され、プロレタリア・ポジティヴィストは本当の労働科学、社会改良の指針を打ち立てようとした。ポジティヴィストたちが労働局の職員のリクルートのための無視しえないつぼを形成したのは、プロレタリア・ポジティヴィストと、パリ・プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルとが、労働者階級

14) 請負業者や協同組合のメンバーには閉ざされた。Cf. F. Birck, *op. cit.* p. 56.

I. Lespinet-Moret, *L'Office du travail. op. cit.* p. 93.

15) Cf. F. Birck, *op. cit.* pp. 55, 57. I. Lespinet-Moret, *L'Office du travail. op. cit.* p. 96.

16) E. コラは、ポジティヴィスト国際協会 la société positiviste internationale 代表、E. ファニョは娘婿。フランス国立文書館のコラ文書は、A. クフェルに関する貴重な資料を含む。

に関する A. コントの仕事の続行したからである¹⁷⁾。

プロレタリア・ポジティヴィスムの内容にかかわる 2 人の叙述を見よう。F. ビルクによると、A. コント自身は、ポジティヴィスムを様々な進歩主義的、革新的教義、とりわけ Kommunismus や Sozialismus に極めて近いと考えたが、経験主義的、革命主義的解決策に対して、ポジティヴィスムの合理主義的、平和的解決策を対置した¹⁸⁾。プロレタリア・ポジティヴィスムが社会主義や共産主義と近い目標を持ちながら、そこに至る手段として、革命主義を否定し、平和的プロセスを主張することが、A. コント自身から生じているとされる。

I. モレ・レスピネは、I. フィナンスについて、私的所有の擁護が彼の十八番であったとし、個人的所有を肯定しながら、富の起源が社会的であり、その利用もまた社会的であるべきとの発言を紹介する¹⁹⁾。さらに、フィナンスによって、協同組合主義が、労働者の活力を失わせるものとして一刀両断にされ²⁰⁾、「我々は、資本と労働の関係を平和的に解決しようとしており、工業家と彼に雇われる人々の相互の義務の全体を確立し、自由に受け入れることを助けようとしている」と主張されたとする²¹⁾。レスピネは、私的所有の承認、しかし、その富の社会的利用、資本と労働の対立の平和的解決などがプロレタリア・ポジティヴィスムの基本理念であったとするのである。

17) Cf. I. Lespinet-Moret, *L'Office du travail. op. cit.* p. 134.

18) Cf. F. Birck, *op. cit.* p. 45.

19) Cf. I. Lespinet-Moret, *L'Office du travail. op. cit.* p. 94. フィナンスらが1904年に再建した民衆教育ポジティヴィスト協会の規約では「進歩と秩序」が掲げられたことも指摘する Cf. *Ibid.* p. 94.

20) Cf. *Ibid.* p. 89.

21) Cf. *Ibid.* p. 93.

第2節 A. クフェルとプロレタリア・ポジティヴィスム

(1) 1876年労働者大会向けのプロレタリア・ポジティヴィストの主張²²⁾

——職業教育・議会・生産協同組合——

この報告の序文において、労働者大会の性格と、出版の事情が説明される。それによると、セーヌ県のプロレタリア・ポジティヴィストはこの大会に参加し、そこにかけられた問題のいくつかについて論じることを決定したが、1人しか報告ができなかった。それは、この大会において、彼らの言葉での、「形而上学的哲学」あるいは「革命的教義」の信奉者が多数派であり、ポジティヴィストの報告、発言が制約されたからである。個別の問題の検討の前に、「形而上学的哲学」、「革命的教義」²³⁾との基本的な見解の相違をポジティヴィストがどのように捉えていたかを、この序文から見

22) CGT 設立に先行する労働者大会 *Congrès ouvrier* は、1876年（パリ）、1878年（リヨン）、1879年（マルセイユ）と3回を数える。ただし、マルセイユ大会は労働者・社会主義者大会 *Congrès ouvrier et congrès socialiste*。1876年パリ大会は、E. ドレアンによれば次のようなものであった。まず、議長シャベル Chabert は、大会が純粋に、労働者的、経済的、職業的領域に止まることを約束した。要求として、8時間労働日、製造業における夜間労働の廃止、賃金の平等、労働者のための退職給付が決定された。要求の最も大胆なものは、全国的な無料の職業教育要求であり、また、満場一致で議会における労働者候補者原則を採択した。パリ大会は保守的な新聞から称賛されたが、ロンドンの亡命者からは激しい攻撃を受けた。E. Dolléans, *Histoire du Mouvement ouvrier*. 1947. pp. 18-19. J. ブロンによると「女性の組合権」「協同組合の拡張」が要求された。J. Bron, *Histoire du Mouvement ouvrier français*. Tome I. 1968. p. 244. さらに、G. ルフラン『フランス労働組合運動史』1974年、谷川稔訳、23-24ページ参照。CF. C. Willard, dir. *La France ouvrière. Histoire de la classe ouvrière et du mouvement ouvrier français*. Tome 1. 1993. Robert Goetz-Girey, *La pensée syndicale française. Militants et théoriciens*. 1948.

23) *Le positivisme au congrès ouvrier*. 1877. *op. cit.* p. 5.

ておこう。まず、彼らによると、「革命」が追求する目的とポジティヴィスムの目的は同じであり、手段だけが異なる。「どちらの側でも、求められているのは人間の特性と、その世俗的、社会的状況の不断の改善である」とされる²⁴⁾。当時の「革命派」が、実際に、この「目的的一致」に同意したかどうかは不明である。しかし、プロレタリア・ポジティヴィストが「革命派」との関係をおのうに捉えていたことは注目すべきである。

両者の、基本的対立点とされるのは次のとおりである。「形而上学の教義」は、その信奉者、革命家、デモクラットの手にまったく空想的諸原理、すなわち、階級の不平等、過大な権力に反対して、両性、諸個人の平等、役割の同一性の原理を与える²⁵⁾。これに対して、ポジティヴィスムは自然に対してと同様に、社会生活の現実的・必然的条件を観察し、確認する²⁶⁾。具体的には、女性の役割は、母、教育者、家事であり、労働者であるべきではないとして性別役割分業を強調する²⁷⁾。さらに、資本の個人的所有、指導する経営者と実行する労働者の分業、別の表現では、能力の多様性、理論家と実践家（企業家と労働者）への機能、役割の分離を承認する²⁸⁾。また、「改善」を実現するためのプロセスにおいては、直接行動への呼びかけ、危険な宣伝は意気阻喪、失望、疑いをもたらすだけであり、平和的、漸進的で確実な変化を望むとする²⁹⁾、³⁰⁾。

24) Cf. *Ibid.* p. 7.

25) Cf. *Le positivisme au congrès ouvrier*. 1877. *op. cit.* pp. 7-8.

26) Cf. *Ibid.* p. 8.

27) Cf. *Ibid.* p. 9.

28) Cf. *Ibid.* pp. 11, 13.

29) Cf. *Ibid.* p. 17.

30) ここには、性別役割分業を別にすると、後の、CGT 内での革命主義と改良主義の基本的対立点が存在しており、それをポジティヴィストが明瞭に認識していたのである。ここで取り上げられている「革命的教義」と、後にCGTの多数派となる革命的労働組合主義を同一視することはできないが、

E. ラポルト 職業教育ではなく普遍的人格教育を^{31), 32)}

職業教育に関するラポルトの報告は、まず、現状の労働者向け職業教育について、工業に、より多くをもたらし、より速く、よりよく働く労働者を生み出すことが目的とされており、普及率が低い現状ではそれを受けた労働者に、雇用の安定や高い賃金をもたらしうるとしても、一般化すれば、結局経営者を利するだけであるとする。また、このような職業教育は、若い人々の努力を物的生産だけに向けさせ、より高い熱望を考えさせないことにつながるとする³³⁾。総じて否定的な評価が下される。ポジティヴィスムは階級協調主義ではあるが、このように、階級の対立的関係については明確な認識を持っていた。

ラポルトは、次いで、職業の観点では労働者は経営者に劣るものではないが、知的文化で劣位にあり、議論の能力を欠き、可能なこととそうでないことの区別ができないとする³⁴⁾。ここには、革命主義ないし、それを支持する労働者の状況についてのポジティヴィストの特有な認識がある。若干長くなるが、以下の引用にそれは明らかである。「我々は、ばかげた観念に夢中になり、……我々の観念をそれが値するものとして取り扱ってくれる人々に反抗するのである。我々の大義に極めて嘆かわしい役割を果たす人々をヒーローとみなし、我々の恩人に憎しみをぶつけるのである。

ともにフランス革命の伝統に基づいて、革命的行動を称揚する点では共通している。

31) この演説は、大会ではなされず、ラポルトがメンバーであった教育に関する第4委員会で報告された。Cf. *Ibid.* p. 19.

32) I. モレ・レスピネは3人の報告について簡単に言及する。その中で、E. ラポルトが職業教育を取り扱ったのは、「個人的、社会的」人間に焦点を合わせた教育、つまり生物学、道徳、社会学をそこに付け加える必要性を強調するためであったとする。Cf. I. Lespinet-Moret, *L'Office du travail. op. cit.* p. 93.

33) Cf. *Le positivisme au congrès ouvrier. 1877. op. cit.* pp. 22-23.

34) Cf. *Ibid.* p. 27.

……我々の敵は我々を子供扱いし、……我々は彼らにとって議論するに値しない劣った存在である」と³⁵⁾。前稿で、設立期 CGT において、強い反知識人主義、無教養主義とも言うべきものが支配的であったことを指摘した³⁶⁾。CGT 設立に先立ってではあるが、ラポルトは、フランスの労働運動、革命運動の中にある、この傾向を強く認識していた。

この認識は、1832年、1848年、1871年におけるプロレタリアの犠牲についての評価から来ていた。ラポルトは次のように言う。「我々はこれまで、夢に熱中し、偽りのユートピアでしかなかったものに解決策をみると信じてきた。そして、平和的議論で打ち負かされたときに暴力で追求し、流血に倒れた」³⁷⁾と。ここには、フランス労働運動の革命主義的伝統を否定するポジティヴィストの立場が明瞭に示される。

ラポルトが提示する労働者教育のあるべき姿は、社会生産、個人生活に必要なより完全な知識を得、国家、市、家族の運営にかかわることがらについての考察に習熟し、資本と労働、富の管理関係が生み出す議論において、いつも理性的な提案だけをするができるようになることである。そして、労働者が知的になれば、経営者が変化し、道徳化された労働者は、彼らを雇う人々を道徳化すると言う³⁸⁾。労働者教育についての具体的な方針は次のとおりである。それは、まず、直接の利益のための教育ではなく、知的、道徳的進歩の道具としての教育である。その上で、「プロレタリアートにふさわしい教育は、人類の知識の全体を含むもの、すなわち普遍的教育、総合的教育である」とする³⁹⁾。数学、自然科学を前提とし、

35) *Ibid.* p. 28.

36) 拙稿前掲「オギュスト・クフェル考序説」37-38ページ。

37) *Le positivisme au congrès ouvrier*. 1877. *op. cit.* pp. 37-38.

38) Cf. *Ibid.* pp. 28-29, 30.

39) *Ibid.* p. 31.

個人と社会の2つの面での人間についての学、すなわち生物学と社会学を含まねばならないと⁴⁰⁾。そのために、作業場、農場で働く、14歳から21歳までの労働者に対する7年間の夜間講座が設けられるべきであるとする^{41)、42)}。

プロレタリア・ポジティヴィストは、階級対立を鋭く認識しながら、フランス労働運動の革命主義的伝統を否定し、労働者階級の知的、文化的水準を向上させることで、経営者と対等な立場に立つことを目指していた。知的、道徳的進歩のための教育こそが求められるべきであり、それは、社会変革の手段であるとともに、その目的そのものであった。それは、CGT設立前後のフランス初期労働運動において革命主義がはらむ反知識主義という問題点を鋭く突くものでもあった。しかし、それは一種の知的エリート主義とも結びついていた。数年間の一般教育的な講座への出席が入会の条件とされることは、フランス革命の伝統の否定と結びついて、フランス労働運動の中で、彼らがごく小さな位置しか占めなかったことを納得させるものである。しかし、彼らの確信の強さ、少数でありながらも確固とした位置を保ち続けた原因も示唆される。

F. マニャン 多数者の選挙・投票よりも少数者の評価・批評を

マニャンの報告は、多数の労働者議員による議会を通じた社会変革という展望を批判し、プロレタリア・ポジティヴィズムの議会に対する立場を

40) Cf. *Ibid.* pp. 35-36, 40.

41) Cf. *Ibid.* p. 43.

42) 以上の叙述において、オギュスト・コントの社会学が称賛される。ポジティヴィズムそのものを考察する上では見落とせないとしても、コント主義の全体を扱うことは我々の任に余ることであり、また、労働組合運動とのかかわりを問題にするここでは以上の指摘にとどめて十分であろう。とりあえず、清水幾太郎『オーギュスト・コント』2014年参照。

明らかにしようとする。彼は、報告の冒頭で次のように議会主義を批判する。「将来が労働者階級出身の立法家の数に依存することを信じる、極めて尊敬すべき多数の市民の見解に与しない」と。また、「状況をはっきりと変更するために、十分な数の労働者を議会に送り込むことはほぼ不可能である」と⁴³⁾。ただし、「フランスの労働者が下院議員になることに絶対反対するわけではない」として、労働者による議会活動、労働者議員の存在そのものは肯定する⁴⁴⁾。プロレタリア・ポジティヴィスムが改良主義であるとするなら、そして、後の改良主義についての常識からすると若干奇異に見える、このような主張は、国家、議会、選挙についてのある認識に基づいていた。マニヤンの論述に沿って、検討しよう。

彼は、まず、労働者を含む選挙民に対する強い不信を表明する。それは、フランス革命以降の歴史から導き出される。すなわち、2月革命において、社会主義的民主主義者は、普通選挙に訴えて、新しいシステムを提案するために、革新者やその弟子たちを議会に送り込もうとしたが、このシステムが新しさのために、提案のチャンスがないことを見ようとせず、反動の手において、それらが、公衆の偏見に誇張されて、恐ろしいものに転化されることを見ようとしなかったと。また、民主主義的共和主義者は、忠実に普通選挙を組織するが、単純にも、選挙民が共和主義者の見解の方向で投票すると信じ、選挙民の大部分が見解を持たず、候補者を彼の公約によってしか知らず、この公約の大部分は嘘であることに注意しなかったと。そして、彼ら、お人よしの失望は、普通選挙が6月の大虐殺をもたらす議会を与えた時に極めて大きかったと。総括的に、投票が共和国を危うくし、2度はそれをひっくり返すことに役立ったと⁴⁵⁾。

43) *Ibid.* pp. 49, 51.

44) Cf. *Ibid.* p. 49.

45) Cf. *Ibid.* pp. 74-75, 79.

マニャンは、投票・選挙に対して、評価・批評（*appreciation*）活動を置く。「選挙の機能は一時的、むしろ、一瞬であるのに対して、評価の機能は恒久的である」と。また、「選挙の機能はその本性において、本質的に盲目的である。自由な評価だけが、そこに光を当てる。選挙の機能は、選挙民に責任放棄をもたらし、評価は、各選挙の後に、いよいよ大きくなる重要性を得る」⁴⁶⁾と。革命後の歴史において批評が果たした大きな役割を踏まえ、次のように言う。すなわち、評価は、会話、掲示物、新聞、書籍などからなり、全ての社会活動に必要な補足であり、その、道徳的、社会的、政治的影響は明らかであると。また、「本質的に道徳的で、社会的であるとはいえ、この機能は政治に対して、大きな影響力を持たねばならず、解明し、説明することで、公衆の見解を道徳化し続けなければならない」と⁴⁷⁾。

すでに選挙との対比によって示唆されるように、マニャンの議論の中には、強いエリート主義があった。それは以下の叙述に一層明らかとなる。「選挙の機能においては、各市民は、彼がどのような質で優れていると、それを欠いていると、1として数えられる。他方、評価においては、住民全体は、その参加、感覚を上昇させるのに比例したエネルギーによって数えられ、各人は、その本質的な価値、その状況に応じて、影響力を及ぼす」と。さらに、「導くのは、少数である。もちろん。しかし、それは、投票の場合のように、優柔不断の人々によって構成されていない。評価は、活動的で、確信を持った少数が、その力に応じて解明し、強化するものを表明し、広める」と⁴⁸⁾。

このマニャンの議論には、国家、議会の社会への介入の限界についての

46) *Ibid.* p. 65.

47) *Ibid.* pp. 62-63.

48) *Ibid.* pp. 66-67.

以下の認識があった。「国家は出版や集会を管理することをやめ、物的秩序を守ること……外交関係や金融を守ることだけに限定されるべきである」と。さらに、「社会問題の解決策は、政治的解決策ではない。立法は、必要な自由の大きな量を残すようにしか介入すべきではない。解決策は、本質的には道徳的であって、評価の機能によって表明される世論に属する」と⁴⁹⁾。その原因については、A. コントに直接依拠しながら、次のように言われる。まず、「近代社会の構成員の関係は、それが、住民の独立、尊厳を脅かさずに、法によって規制されうるためには、知性、感性、人格に依存するあまりにも多くの多様な利害によって複雑になっている。したがって、A. コントが述べたように、この問題は、法的に解決されるためには複雑すぎる。しかし、道徳的に解決されうるし、されねばならない」と⁵⁰⁾。また、共和国政府の下では、法律は生活の全ての行動の普遍的で、恒久的な規範とみなされるべきではなく、進歩は絶えざる法律の減少、あまりにも多数で、費用がかかり、少なくとも邪魔になる傾向がある行政に携わる人の数の絶えざる減少のうちにあると。このやり方は、全ての人間の法則が評価されうる実証 positif の原理が存在しているので、一層容易であり、A. コントが表明したように、全ての人間の法は、自然法則の知識に従わねばならないと。ここから、「プロレタリアートが、実証主義的なやり方で、その要求を表明することができるならば、彼らは、もはや、中央権力との間に仲介者は必要ではない」と結論づけられるのである⁵¹⁾。自然科学の法則と同一視しうる社会についての法則の発見によって、社会問題が解決しうるので、国家、議会の役割が限定されうるとすることと、労働者の知的、道徳的發展によって、対等な労使の関係を形成しうるの

49) *Ibid.* pp. 82-83, 84.

50) *Ibid.* p. 85.

51) Cf. *Ibid.* pp. 86, 88.

で、国家介入が不要であるとするのは、必ずしも明確に結びつけられていない⁵²⁾。

ラポルトは、教育、とりわけ普遍的・総合的教育を重視し、それによって、経営者と対等な地位に立つ、そのような社会こそが、プロレタリア・ポジティヴィストの目的であるとした。しかし、他方、当時の状況では、プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルが長期のイニシエーションを受けることのできる極めて少数の労働者しか組織していない。したがって、マニャンが強調する評価の活動は、プロレタリア・ポジティヴィストに限定されるものではないとしても、彼らを中心とする少数者によって遂行されるものであった。国家、議会の社会への介入の限界を踏まえ、多数の労働者の選挙に、少数者の批評を対置するプロレタリア・ポジティヴィスムの知的エリート主義が明瞭である。

I. フィナンス 協同組合の限界、経営者・管理者の必要性

最後に、I. フィナンスが協同組合についての報告を行う。彼によると、当時は、1848年、1865年に次いで、大きな協同組合運動の前夜にあり、「プロレタリアートの活動家の多くが、協同組合をあらゆる悪弊の唯一の解決策、我々の物的、知的、道徳的要求を完全に満足させることに到達する唯一の実践的手段」、「全ての状況、全ての場所、いつでも、どんな対象にも適用しうる普遍的な万能薬と考えている」⁵³⁾状況であった。これに対して、フィナンスは、報告の多くを、フランスにおける生産協同組合、イギリス

52) マニャンの労働者知的エリート主義が、A. コントとの接触によって形成されたことは否定されない事実であるとしても、コントのポジティヴィスムとプロレタリア・ポジティヴィスムが完全に調和するものであったのかどうかは検討の余地がある。

53) *Ibid.* p. 97. pp. 97-98.

の消費協同組合、ドイツの信用組合の歴史、実態にあてている。マニヤンのフランスにおける議会や選挙の歴史に関する叙述とともに、ここからは、事実の検証という手続きを踏んで議論を展開しようとする姿勢が読み取れ、それこそ、彼らが標榜する「実証主義」によるものである。

フィナンスの結論は、フランスにおける生産協同組合は、その多く、大部分が消滅しており、失敗であったこと、しかし、それに止まらず、労働者の団結を破壊したことである。例えば、彼自身が属する塗装工の運動においては、協同組合の計画が進められるごとに分裂が生じ⁵⁴⁾、また、当該の1870年の労働者大会には、「ごく少しの生産組合、消費組合、信用組合、相互扶助組合しか代表を送っていない」⁵⁵⁾ことを指摘する。それは、かろうじて存続している生産組合の次の事態とかわらせられる。すなわち、例えば、1868年に設立された金箔工の生産組合は消滅して、2人のパトロンを生み、また、抵抗組合を基礎にして設立された生産一般組合もすぐに2人のパトロンを生んだだけであり、1869年の他の試みも、1人のパトロンになり、結局、パトロンをなくそうとしたにもかかわらず、計5人のパトロンを生んだと。あるいは、同じ時期に信用連帯組合を設立して、ほとんど全ての労働者を集めた金メッキ工の生産組合は、連帯組合を減ぼし、かつて組合員であった6人の新しいパトロンを生み、それ以来、どんな目的のためにも金メッキ工を組織することができなくなった⁵⁶⁾。

さらに、消費組合についての次の叙述も注目される。すなわち、「全ての協同組合、とりわけ消費協同組合において、報酬を要求せず、管理や様々なサービスを引き受け、利益を実現するのは、積極的で献身的な少数の人々である。多くの貴重な時間が失われ、それは、実現される小さな

54) Cf. *Ibid.* pp. 114-115.

55) *Ibid.* p. 116.

56) Cf. *Ibid.* p. 120.

物的利益では埋め合わせられない」⁵⁷⁾と。また、当時の論者から次の引用をする。「工業組合のこれらの経験の顕著な結果は、能力のある管理者の絶対的専制である」⁵⁸⁾と。これらに共通するのは、工業企業にとって、経営者、管理者の存在が不可避であるとの認識である。フィナンスは、それを、ポジティヴィズムの先達 P. ラフィットからの次の引用で再確認する。「この組合は幻想的な経済的解決策である。というのは、それは個人的パトロンを集団的パトロンで置き換えることであるから」。「成功した組合は労働者から構成されていない。多くの連合したパトロンが労働者を雇っているものであり、協同組合の形成まで推し進めることは、プロレタリアートを傷つけ、ブルジョワジーの側に、もっともエネルギーで、知的なメンバーを追いやることで、その自然な指導者を奪うことである」⁵⁹⁾。ここには、プロレタリア・ポジティヴィズムの1つの要素が明瞭に示されている。すなわち、今日の工業組織が「管理者」を必要とすること、パトロンは所有者であるとともに、この機能を担っていること、労働者はこれを認めた上で、パトロンとの対等な関係構築を目指すべきことである。

フィナンスは、これを踏まえて、全ての協同組合的傾向を見限り、より広いやり方で、労働組合や抵抗組合によって、賃金労働者の団結を実現することが重要である⁶⁰⁾とした上で、次のように結論する。「我々は、パトロンと労働者の紛争を示談で、賃金率、労働時間、作業場規則 etc. を定

57) *Ibid.* p. 137.

58) *Ibid.* p. 141.

59) *Ibid.* pp. 142, 143-144.

60) 後の1879年マルセイユ大会では、協同組合に反して、労働組合だけが労働者の利益を満足させ勝ち取ることができる。協同組合は、消費組合であれ、生産組合であれ、特権的な少数の境遇の改善しかなしえない。しかし、運動には役立ち、この意味でだけ大目に見られるとされた。C. Willard. *op. cit.* p. 273. ここからすると、ポジティヴィストの主張がある程度認められたことになる。

めるために、調停委員会を任命しなければならない。「基本的原理として、社会問題が所有者を変えることにあるのではなく、富の使用を定めることにあると認めるので、我々は、……社会問題がもたらす唯一の解決策は、道徳的解決策であり、法的な契約や解決策は幻想であることを認める」。「我々は、資本と労働の関係を平和的に解決するよう努力し、工業の指導者と雇われる人々との相互の義務全体の確立と、自由な受け入れを助ける。この義務をすでに知的なパトロンは認めようとしている。また、彼らは、我々の要求が暴力的で、絶対的な性格をなくせばそれだけ容易にそれを認めようとするであろう」⁶¹⁾。ここに、パトロン（所有者・経営者）と労働者の存在を必然とし、その上で、両者の対等な関係を、平和的な道筋で形成すべきであるとのプロレタリア・ポジティヴィスムの基本認識が明瞭に示されている。

3人の報告は、プロレタリア・ポジティヴィストが緊急の、実践的課題に答えようとしたものであり、その思想を体系的に述べたものではない。また、3人の個性の相違も無視しえない。しかし、以上の検討からは、3人の見解の公約数の形でではあるが、それなりに一貫した体系を持つ思想としてのプロレタリア・ポジティヴィスムの存在を確認してよい。F.ビルク、I.モレ・レスピネは、私的所有、階級協調、平和的プロセスなど、プロレタリア・ポジティヴィスムの改良主義的性格を指摘した。それは、プロレタリア・ポジティヴィスムの本質的規定として肯定されるべきである。しかし、教育を通じた労働者の地位向上、経営者との対等な関係の構築、選挙、投票への否定的態度と自覚した少数者による批評活動の重視、国家介入への拒絶とも言うべき姿勢、さらに、平和的プロセスが教育と特有な結びつきを持たせられていたこと等は、後に一般化する改良主義とは

61) *Ibid.* pp. 148-149, 149, 149-150.

様相を異にするものであり、ここにプロレタリア・ポジティヴィズムの重要な特徴があった。

ところで、ビルクによれば、クフェルは1871年からポジティヴィスト・サークルでの教育を受け、1880年に加盟した。クフェルが加盟後直ちにサークルの代表となることからすると、彼が、この1876年報告の作成にかかわっていた可能性も否定できない。しかし、そこに表明されたプロレタリア・ポジティヴィズムはクフェルにとって与えられたものとするのが妥当であろう。

(2) A. クフェルとプロレタリア・ポジティヴィズム

クフェルが関与した資料を検討しよう。まず、退職金庫に関する議会委員会の質問に対するパリ・プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルの1880年の回答である。これは、さきに見た3人の報告者のうちの、E. ラポルト、I. フィナンスにクフェルが加わって連名で出されている。肩書は、フィナンスが代表、ラポルトが書記、クフェルが会計であり、フィナンスの主導性を仮定しておく。6ページ弱のごく短いものではあるが、その内容は前節で確認した基本傾向に沿いながらも、極端な形でプロレタリア・ポジティヴィズムの考えを示すものである。

この退職金庫は「幻想であり、危険であり」反対であるとの強い態度が冒頭から示される。その理由として、第1に、「全てを生産するのがプロレタリアートであり」、税金によろうと、労働者、経営者からの控除によろうと、いずれにしろ、「結局支払うのは、労働者である」⁶²⁾と。しかも、官僚機構の介在によって、「労働者は、彼の老いた日のパンを確かにするために、3フランを支払って、2フランしか返ってこないのである」

62) E. Laporte, I. Finance, A. Keufer, Des Caisse de Retraite, 1880, op. cit. p. 3.

と⁶³⁾。まず、プロレタリアートが富の生産者であるとの強い自負を確認しよう。さらに、それは、「人間集団であるプロレタリアートは、世界の将来を担っている。というのは、力と富が他の階級を墮落させているときに、彼らを再生し、強化するのはプロレタリアートであるから」とする社会の変革者としての自覚と結びついていた。ここには経営者の「墮落」が示唆され、彼らが主張する経営者との対等な関係が、単なる現状でのそれではなく、両者の向上を含んでいる点で興味深い。

同時に、国家、官僚への強い不信感が見落とせない。それは、第2の論点とされる「道徳的次元」の問題において一層明らかとなる。それによると、老人の保護は、例外を別にすれば、国家の役割ではなく、「個人が老人を保護できる」と⁶⁴⁾。国家の役割の限定、個人生活への介入に対する強い拒絶の姿勢が明瞭である。その上で、「退職金庫は2重の道徳的危険を生み出す」とする。まず、人は自らが老後に備えるべきであって、この制度は、先見の欠如を増大させる。次いで、すでに多くの慈善施設が弱めている、「愛着、敬愛、親切の感情を減らす」と。さらに、このような制度は、国家がプロレタリアートの生活に全面的に介入することであり、法律上の Kommunismus であるとさえ言う。結局、年老いた親を養うことが継承されるべきとされる⁶⁵⁾。

ここには、プロレタリア・ポジティヴィストの国家介入への拒絶とも言うべき態度が見出される。彼らは、国家そのものを否定しない点ではアナキズムとは明確な一線を画している。しかし、その距離は近いとさえ言える。他方、ここに見られる旧来の家族道徳への固執とも言うべき主張は何を意味するのであろうか。これまで見てきたところでは、プロレタリ

63) *Ibid.* p. 4.

64) Cf. *Ibid.* p. 5.

65) Cf. *Ibid.* pp. 4-6.

ア・ポジティヴィズムが強いエリート主義的傾向を持っており、それは、手工の熟練と結びついた独立性とかかわっていた。また、経営者との対等な関係の構築という方向性も、旧来のコルポラシオ的な親方と職人の対等への回帰と読みとることが可能である。プロレタリア・ポジティヴィズムが強い復古主義的性格を帯びていたことを確認しよう。ただし、当時の労働組合運動に支配的であった、革命主義、アナーキズムの傾向も保守主義をはらんでいた可能性があり、今後の検討課題である。

1884年のパリ市会選挙に対する、パリ・プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルの態度表明を見よう。クフェルは、植字工の肩書だけであるが、E. マシー、塗装工、書記、サン・ドミニク、鉛管工、会計とあることからすると、クフェルが代表であったとみなせる。まず、以下の結論的叙述が注目される。すなわち、「我々に必要なのは、民衆の人気を渴望する騒がしいアマチュアではなく、用心深く、賢明な会計士である」と⁶⁶⁾。

第2に、現在、パリで物価が上昇し、労働者の生活が困難になっているとし、その原因は、パリ市が、大土木事業を進めるために、間接税を上げ、また、地方や外国から建築労働者が流入しているからであるとする。そして、すでに外国との競争で経営者の状況が危機に陥っているときに、賃金増要求と破滅的なストライキが生じているとする。彼らの主張の最大の眼目は、パリ市の支出を可能な限り削減することにおかれる⁶⁷⁾。

以上から、公共事業に関しても、それを労働者救済に転換しようとするような方向性は全くなく、パリ市の介入を制限し、経営危機を理解した上

66) A. Keufer, E. Machy, Saint-Dominique, Elections municipales du 4 Mai à 1884, op. cit.

67) Ibid. 「共和国への明瞭で、全面的な賛成で満足し」、「納税者として……態度を表明できる唯一の機会である」とすることにも、彼らの立場が明瞭である。Ibid.

で労使協調を進めようとする姿勢が明らかである。たとえ、これらが客観的にはある種の根拠、合理性を持つとしても、労働者の広い支持を得る宣言であるとは考えられない。

クフェルは、この間、1881年には書籍労連設立に加わり中央委員、1883年にはボストン博覧会にバリ植字工代表として参加し、報告書を書いている。さらに、1884年には書籍労連中央委員会書記長となり、主導権を掌握している。このような組合活動と並行しながら、積極的にプロレタリア・ポジティヴィストとしての、さらにはその指導者としての活動を行っていたのである。クフェルにとって、この2つの活動は強く結びついていた。これを、より明瞭に示すものは、1891年のマルセイユの書籍労働者祭における、書籍労連の代表としてのスピーチである。組合内で、プロレタリア・ポジティヴィスムへの信奉を明瞭に述べたものとして興味深い⁶⁸⁾。

1891年スピーチで展開される議論の前提としての製本業の自由化についての評価は見落とせない。すなわち、1870年デクレによる自由化以前の特許制度の下では、労働は規則的であり、パトロンは作業場で生活し、労働者を評価し、その必要を知っており、相互の評価と敬意があったとする。これに対して自由化以降は、進歩の口実の下に、パトロンの生存条件と労働者のそれを脅かし、労働条件を変え、児童と女性の搾取に結果したと。総じて、競争、技術発展、株式会社は、労働条件を全面的に変え、安定を破壊し、経営者と労働者の関係を大きく変え、プロレタリアートは、放置され、社会から隔絶されているとする⁶⁹⁾。

このような状態に対する解決策が検討され、まず、生産協同組合が否定

68) 「私は、確信を持ったポジティヴィストの教義の信奉者であることを認める」。Compte rendue de la Fête des travailleurs du Livre de 1891, op. cit. p. 56.

69) Cf. Ibid. pp. 52-53. ここにもプロレタリア・ポジティヴィスムの、あるいはクフェルの復古主義的傾向を見て取ることができる。

される。次いで、国家、立法家の依存を拒否し、労働者自身による改善の実現を対置する。「労働者が行動し、彼らが組織されれば、彼らは、彼らが権利を持つ社会改良を彼ら自身で獲得するための、物的、精神的力を持つ」⁷⁰⁾と。さらに、私的所有の廃止と土地の生産手段の国有化を主張する Kommunismus に対して、所有欲が人間の本性に属するものであること、「管理する長と実行する労働者のいない工業組織を考えることは不可能である」⁷¹⁾と批判する。

これに対して、A. コントによって基礎づけられたポジティヴィスムは、労働者の社会への編入を目的とし、「全ての階級、両性に与えられる、科学教育を手段として、エゴイズムと反対に、他人を思いやる感覚を発展させ、道徳的、知的改良によって」社会変革が実現されるとする⁷²⁾。しかしながら、様々な見解の違いを尊重した上で、労働者の力を統一する組合の重要性を指摘して、スピーチを締めくくる⁷³⁾。後継書記長リオションは、クフェルが書籍労連の仕事を宗教への勧誘の手段とは考えず、寛容な精神を発揮したとした。それは肯定されるが、クフェルのこのスピーチは、彼の中で、組合活動とポジティヴィストとしての活動が矛盾なく、強く結びついていたことを示すものである⁷⁴⁾。

70) Ibid. p. 54. 「多くの生産協同組合が創設され、その大部分は、多くの資本を使い果たし、それが生み出した期待を破壊して、今日では消滅している」。
Ibid.

71) Ibid. p. 56.

72) Ibid. p. 56.

73) 1891年時点では、書籍労連内でのクフェルの主導権は確立しているが、なお、パリ支部を中心にした分裂状態が解決されてはいない。

74) このスピーチでは、1876年報告や、以下で検討する1914年スピーチに顕著な、性別役割分担の主張は見られない。書籍労連内でも女性労働者雇用は大きな問題を引き起こしていた。クフェルは、対立の生ずるこの論点を避けたとと言える。彼の組合活動家としての柔軟性を見ることができる。

第3節 救世主としての労働者——A. クフェルの プロレタリア・ポジティヴィスム

ここでは、1914年ポジティヴィスト協会でのスピーチ⁷⁵⁾を検討する。前節で検討した1876年報告は、3人が当時の実践的課題に応えたものであり、我々は、そこから、プロレタリア・ポジティヴィスムをいわば抽出した。国際ポジティヴィスト協会でのクフェルのスピーチは、彼のポジティヴィスム理解を知る上でと同時に、プロレタリア・ポジティヴィスムについて、その中心的人物の一人によって全面的に展開されたものとして貴重である。このスピーチの特徴の一つは、A. コントへの言及、引用、紹介が大きな分量を占め、それと不可分な形でクフェルのプロレタリア・ポジティヴィスムが展開されていることである。いま一つは、他のプロレタリア解放理論、とくに Kommunismus を批判しながらプロレタリア・ポジティヴィスムの優位性が強調されることである。全体として、理論家としてのクフェルが強く印象づけられる。また、前節との検討と併せて、クフェルのプロレタリア・ポジティヴィスム信奉の一貫性、強さを確認するものにもなっている。まず、クフェルのコント主義とのかかわりを検討し、その上で、プロレタリア・ポジティヴィスムの積極的展開を見る。

このスピーチは、「一般的救世主 (la Providence générale), プロレタリアートの祭り」との注目すべき表題を持つ⁷⁶⁾。Providence とは神の摂理、あるいは神そのものを意味し、そこから救いの神、天佑などの派生的意味が生まれている。後に l'Etat providence が福祉国家を意味する言葉として用いられることになる⁷⁷⁾。プロレタリアートが救いの神、救世主であること

75) A. Keufer, Fête de la Providence générale. op. cit.

76) Ibid. p. 1.

77) 後にフランスでは l'Etat providence が福祉国家の意味を持つことを考え合

が宣言されているのである。クフェルは、スピーチを次の言葉で始める。「オギュスト・コントによって作られた表に基づく抽象的カレンダー第13月、人類の一般的救世主 (providence) とみなされたプロレタリアートに捧げられた月を祝いましょう」と⁷⁸⁾。クフェルはコントによってプロレタリアートが救世主に擬せられたことを強く受け止めている。クフェル自身が貧しい出自の労働者であった。徒弟修業を経て資格を持つ熟練工、植字工になったとはいえ、友人プルトンによって「搾取」と表現されるような労働に従事していた。クフェルのコントへの傾倒の最深の理由がここにあった。それはまた、マニヤンやフィナンスとも共通するものであり、これこそがプロレタリア・ポジティヴィズムの核心であった。

コントに依拠し、クフェルは、労働者を、まず、過去の富の生産者、伝達者と捉える。「一般的救世主の祝祭を厳粛に祝うためには、我々は、まず、あらゆる国、あらゆる地方で蓄積された富を我々に伝えた、過去の世代の民衆に祈りをささげねばならない」と。第2に、現在の富の生産者としての労働者。「数百万もの下層の労働者たちがつらく、増大する労働によって全ての人々の規則的生存を確かにしている」⁷⁹⁾と。ここでも「つら

わせると、国家介入を厳しく拒絶するプロレタリア・ポジティヴィストによる、一般的救世主プロレタリアート la providence generale なる言葉は極めて興味深い。ただし、田中拓道によると l'Etat providence が肯定的な意味で使われるのは20世紀後半以降であり、19世紀末では、社会生活に介入する専制的国家の意味を持っていた。プロレタリア・ポジティヴィストの国家介入拒絶もより一般的な観点から考察される必要がある。田中拓道「フランス福祉国家の思想的源流 (1789～1910年) (4) —社会経済学・社会的共和主義・連帯主義—」『北大法学論集』56(1), 97-147ページ参照。

78) A. Keufer, *Fête de la Providence générale*. op. cit. p. 1. ポジティヴィストは13ヶ月から成る独特のカレンダーを作った。ただし、13月がプロレタリアートに捧げるのが一般的であったとは言えない。しかし、そうであれば一層クフェルのこの発言の意味は大きいとも言える。Cf. *La Maison d'Auguste Comte*. <http://www.augustecomte.org/spip.php?article22>.

い労働」との表現が目される。こうして、労働者は、「物的観点でも、知的、道徳的観点でも、一般的な生存を保障する実際のこの救世主 (providence)」とされる。次の表現は、あらためて、このような労働者の境遇への A. コントの共感を強調するものである。「A. コントは、一般的な救世主の資格で、プロレタリアートが実際に果たす、重要な機能を彼らに割り振ることによって、未開時代から報われることの少ない、しかし、生産的な仕事に繋ぎ止められた下層の大衆の労働、寛大さ、公平無私を賛美した」⁸⁰⁾と。労働者の精神性が評価されていることも確認できる。

問題は、労働者が、正当な評価を受けていないことである。次の表現からはクフェルの怒りを読みとることができる。すなわち、「プロレタリアートの資格の中に、侮蔑的な評価を見、そこに含まれる人々を劣った状況に置く公衆の過ち」⁸¹⁾と。また、次の言葉は、労働者が生産した富に関与していないこと、その権利を回復することが、プロレタリア・ポジティヴィスムの基本的な主張であることを示す。「過去の無数の世代によって生み出され、伝えられた巨大な富が、その起源が確保すべき社会的用途を持たない。いつの時代も、協力者であるプロレタリアートは、この資本が彼に提供すべき正当で、公平な満足を奪われている」⁸²⁾と。

プロレタリア・ポジティヴィスムがプロレタリアートを一般的救世主に擬するのは、いま一つの理由によるものであった。クフェルは、A. コントから次の言葉を引用する。「プロレタリアートは、必要な機関と同様に、様々な特別な階級が出てくる社会的集団である」と。また、「全ての社会階級は、世代の継続を確かにしてきたプロレタリアの大衆にその根を持つ

79) A. Keufer, *Fête de la Providence générale*. op. cit. p. 1.

80) *Ibid.* p. 2.

81) *Ibid.* p. 2.

82) *Ibid.* p. 3.

ている。我々の種の再生産が実現されるのはプロレタリアの家族によってである」と⁸³⁾。すなわち、世代の再生産者としての労働者階級である。それは、家族についての認識と、性別役割分担の主張と結びついていた。クフェルは次のように言う。「家族は、個人の創出と、肉体的、道徳的形成に必要な社会の細胞である」と。さらに、「家族の創出と道徳的機能のためには、女性の境遇は確保されねばならない。その尊厳を傷つけることなしに養い、外の労働を免れさせることによって、妻、母、カウンセラー、教育者の役割をうまく果たすことを可能にすることは、男性に属する」⁸⁴⁾と。

ところが、このプロレタリアートの機能は脅かされていた。「自由と労働の権利の口実の下で」、国家と工業、商業の管理者たち、とくに、低賃金を求める経営者によって、女性が家庭を放棄することが奨励されていた。「経営者たちは、宗教的、政治的見解の相違なしに、もっぱら低賃金が提供する有利さだけを考え、女性の外での労働の社会的、道徳的な恐ろしい結果について何も考えない」⁸⁵⁾と言われる。このような考えは、労働者階級の中にも広がっていた⁸⁶⁾。その結果は、「美しい母親としての任務を果たすことをもはや望まない、多くの女性が報酬目当ての仕事に就く。それは若者や、一般的な犯罪の原因であり、アルコール中毒の否定しがたい原因である」、「道徳の忌むべき減退が、家族の自発的な不毛を引き起こす」⁸⁷⁾とされる。

83) Ibid. pp. 3, 7.

84) Ibid. p. 7.

85) Ibid. p. 7.

86) 「最も積極的なプロレタリアートは、家庭に女性をとどめることへの好みを遠慮がちにしか宣言しようとしなない」Ibid. p. 8. 「機能の本当の公平と、実現しえない平等の間の危険な混同が全ての精神を深く混乱させている」。Ibid. p. 5.

種の再生産におけるプロレタリアートの役割の重要性は否定しえないとしても、それをプロレタリアートの本質的機能の第1とすること、さらに、そこからやにわに引き出される、女性を家庭の守り手とする性別役割分担の議論には、プロレタリア・ポジティヴィスムが持つ強い保守主義的傾向を見ないわけにはいかない。もちろん、女性労働者の惨状への批判が含まれていることは見落とせないとしても^{88), 89)}。

救世主としての労働者の観念は、現実社会から排除された労働者を社会に編入し、その地位を回復するとともに、社会そのものを変革する展望を支えるものであった。その道筋は具体的にどのように構想されたのか。その中心に置かれるのが「批評」である。「政治的社会的無秩序の中で、富の悪用の下で、全ての社会的階級による義務の忘却の中で」、プロレタリアートの果たすべき重要な一般的機能、それは批評（appreciation）である⁹⁰⁾。批評とは、「行政権力、立法家、経営者、官僚、最後に政治的社会的影響力の一部を持つ人々の活動を検討し、評価」すること、別な表現では、「市民を統括する責任と名誉を引き受け、商工業の事業を企て管理する責任と名誉を引き受けた人々を評価」することである⁹¹⁾。まず、「政治的、社会的無秩序」、「富の悪用」が指摘され、政治家、官僚は、市民の統

87) Ibid. p. 8.

88) 「自分自身でその生存手段を見出さねばならない独身女性、寡婦等は例外とする」。Ibid. pp. 7-8.

89) ただし、A. コントはこのような家庭における女性もプロレタリアートと位置づけていた。クフェルの議論はこれに依拠していた。「プロレタリアには、その任務がもっぱら家族的で、家庭的で道徳的であり、社会の機能と展開に大きな役割を演ずる女性も含まれる」と。Ibid. p. 5. 女性を保護の対象とする労働立法と女性は家に帰れとする根強い風潮との関連の検討は別の機会に譲る。

90) Ibid. p. 7.

91) Ibid. p. 9.

括者として、また、経営者は商工業の管理者として責任を問われる。しかし、その存在は否定されるのではなく、労働者の批評を通じて義務の忘却から脱し、義務を果たすべきものとして社会の中に位置づけられ肯定される。マニャンは選挙・投票に批評を対置した。I. フィナンスは生産組合が経営者を否定しようとして結局、管理者不在で失敗するか、新しい経営者を生み出すかであるとした。クフェルはここでより根源的に、また総括的に批評を通じた救世こそが労働者の役割であるとするのである⁹²⁾。富と種の生産者である労働者は批評を通じて、社会の中での地位を回復するのである。ここにプロレタリア・ポジティヴィズムの核心がある。それは強い知識主義、道徳主義に貫かれており、その根底にはA. コントの科学主義、とりわけ社会科学の発展と普及が階級の和解、社会平和を可能にするとの認識があった。

したがって、プロレタリア・ポジティヴィズムは、国家機構、資本所有の肯定であり、その意味で、階級協調である。しかしながら、クフェルは

92) 経済恐慌によって、その生存の困難な諸状況によって、家族生活の諸条件において、物的安全において、厳しい打撃を受けている労働者には、このような評価をし、労働者をその社会の編入に向かわせるために介入する権利が与えられている Ibid. p. 8. という。また、「日常的な無私」と「社会的感覚」によって評価の機能は労働者の能力に入るとする。Ibid. p. 9. さらに、「ポジティヴィズムは、こうして、労働者に対して、社会において、その場所を勝ち取るために必要な、重い任務を割り当てる」と。Ibid. p. 8. また、「女性と哲学者の支えで、彼らは、絶えず、エネルギッシュなやり方で、評価せねばならない」と。Ibid. pp. 8-9. 労働運動指導者に関する次の指摘は興味深い。「その活動によって、知的、道徳的価値によって労働者の利益の貴重な守り手になりうるすべての人々にとっての義務は、その地位にとどまり、すべての政治的野心、経営者になることを放棄し、すべての代弁者を必要としているプロレタリアに献身的に奉仕することである」と。Ibid. p. 9. 「過去と将来のいつにおいても、富と権力の賢明で、公平な利用は、その所有よりも重要である」 Ibid. p. 20.

それを容易に実現できるものと考えてはいなかった。彼は、労働者の社会編入という課題は、「それが問題となっている全ての国々において、困難なししばしばミゼラブルな状況下で、如何にして果たされるのか」を問う。そして、「プロレタリアは、社会的感覚を持たない強力な経営者、祖国を持たない資本家に直面する。彼らは、全ての社会的武器、軍隊、司法官、僧侶、政治権力を自由にし、その特権を守るために専制的権力で労働者組織と戦っている」とする。さらに「いたるところで、労働者は、これらの社会的力のエゴイスティックな所持者に従属させられている」と。続けて、高等教育が富裕階級に独占されているとする。あらためて労働者の現状が次のように要約される。「一般的になお社会の周辺で生きる人々の苦しみ、剝奪、ミゼール」⁹³⁾と。救世主としての労働者の観念は、現状への激しい怒りを含んでいた。

これに対する回答が、「教育」であった。まず、一般教育、とりわけ、社会学である。次のように言われる。「両性のプロレタリアに、他の階層に対してと同じ、標準的で一般的な教育の確保」と。また、「両性に彼らの社会的役割を果たす手段を最も与えるように思われる教育は、様々な科学の積極的研究と、主に社会学や、道徳によって個人的・集団的現象の諸原理の手ほどきをする教育である」と⁹⁴⁾。

この点は、ラポルトの報告と共通するものであるが、クフェルの議論は、今少しニュアンスの異なるものを含んでいた。一つは、女性による家庭内での教育。プロレタリアの社会への編入の条件として、女性が教育的役割を果たせることを可能にする男性への規則的労働の供給が挙げられ

93) Ibid. pp. 9, 10.

94) Ibid. pp. 13, 20. 「この教育は、個人や、集団の形成において、全ての社会的富の創出、保存と移転に主要な役割を果たす心理学的現象の分析によって補われねばならない」とも。Ibid. p. 20.

る。さらに、思いやりのある感情の不断の修養を通じて、「他人のためによく働き、家族、祖国、人類への義務を果たすこと」、「日々の適切な鍛錬、寛大でよき感覚への繰り返される呼びかけによって獲得される、性格や心性の改善と改良」⁹⁵⁾とされる、日常生活を律する規範の重視である。クフェルの、プロレタリア・ポジティヴィズムが自助努力への強い志向を持っていたことが示される。これまでの検討からするなら、そこには、熟練工としての、さらに言うなら、コルポラシオン下での職人の自立性、生活規律との親和性を見ることができる。科学信奉とも言うべき一種の進歩主義と強い復古主義との結合がプロレタリア・ポジティヴィズムの特質と言える。

第2に、社会改造の前提としての教育が強調される。「ポジティヴィストの解決策は、どのような性格のものであれ社会的改造は、新しい教育と、道徳的に高い文化による諸見解と慣習の完全な改良を要求する」。それは、個人主義、物質主義に利他主義がとって代わる、心理的、道徳的改良であり、政治的、社会的再構成に先行するものであった。そして、この教育は長い時間を要するものであった。「プロレタリアの教育が形成されねばならない、この最初の時期は非常に長い」。また、社会的改造の目的に到達しうするための手段は、「よき感覚の文化と、利他主義が支配的になるときに、教育によって準備されたゆっくりとした進化によってのみ現実的となるであろう」⁹⁶⁾と。ここからは、教育そのものが社会変革であるかの印象すら受ける⁹⁷⁾。レベリューによる、クフェルの教育への絶対的信頼、

95) Ibid. p. 20.

96) Ibid. pp. 13, 14, 19.

97) 「生活の現実が明らかにする困難の影響によって、ポジティヴィズムの活動のおかげで、一般にすべての階級において、深い決定的な変革は、諸見解や慣習を変える教育が先立つべきであるということが認められている」。
Ibid. p. 10.

政治闘争への無関心、さらには敵意との指摘が肯定される⁹⁸⁾。また、この教育への志向は、変革の漸進性、平和的性格を必然化させるものであった。

クフェルとポジティヴィストにとっての課題、社会変革の方向が次のように総括される。「ポジティヴィストにとって、来るべき世代に課せられた問題は、プロレタリアの近代社会への編入である。それは、階級の破壊や廃止によってではなく、プロレタリアを社会の様々なカテゴリーの水準に上昇させることによって階級闘争を終わらせるであろう。プロレタリアはまさに正当に、行政、商工業の他の雇用者と同じ資格で社会の官僚とみなされるべきである」⁹⁹⁾p. 13. と。教育を通じたプロレタリアートの社会への編入、その地位の上昇による階級闘争の終息が展望される。

クフェルは、他の社会改革を目指す主張と対比することで、プロレタリア・ポジティヴィスムの考えを一層明瞭にしようとする。取り上げられるのは無政府主義と集産主義（ Kommunismus ）である。それは、次のように要約される。無政府主義者は、「労働生産物の公平な享受を人類に保証し、全ての災厄を破壊するために、全ての社会組織を禁止することによって、全ての権威を消滅させることを望む。国家、祖国、経営者階級、賃労働者、所有、家族、司法家、宗教、軍隊、etc. の廃止を」。また、「我々の先人たちによって伝えられてきたすべての制度を白紙にした後に、社会の調和的組織、社会的正義が、全てにとって十分である労働者の自由なグループによって確保される」と。他方、「経営者階級、所有の廃止の支持者である集産主義者」は、「国家の協力と公権力の掌握によって、より良い社会経済組織の再構築を主張する。工場、作業場、行政組織での社会主義の利用によって、工業、商業、行政、政治サービスの完全な機能が確保さ

98) 拙稿前掲「オギュスト・クフェル考序説」19ページ参照。

99) A. Keufer, *Fête de la Providence générale*. op. cit. p. 13.

れるとする」と。また、「一方は、議会主義と国家介入の絶対的敵対者であり、他方は、その深い信奉者である」¹⁰⁰⁾とされる。

ただし、クフェルは、アナーキストが必ずしも明確な体系性を持たず、多くをコミュニストに依拠していると考えていたようである。すなわち、「コミュニスト、無政府主義者、個人主義者、集産主義者は、それらをつかつか大きな相違にも関わらず、その社会学的概念を確立するために、史的唯物論からインスピレーションを得た」と。また、次の表現にもそれは示される。「CGTの中央組織のトップにいる人々は、プルードンや、コミュニスト的なアナーキストによって推奨される主義に好意的にとどまる」¹⁰¹⁾と。

クフェルは、 Kommunismus に対して、「様々な学派の Kommunismus」が「エネルギーに社会問題を提起し、支配階級がエゴイステイックな平穩から出ることを義務付けた」として問題提起者としての役割を評価する。また、ポジティヴィスムは、「プロレタリアの福祉をより確かにするために、富の社会的起源と用途についてはコミュニストの教義と接点を持つ」とする¹⁰²⁾。クフェルが、当時の無政府主義的 Kommunismus、集産主義的（マルク主義的） Kommunismus について正確で的確な知識を持ち、また親近感も表明していることを確認しよう。

その上で、ポジティヴィスムとの相違点が、以下のように示される。「重要な相違が2つの教義を分ける。それはコミュニストが集団的にする

100) Ibid. pp. 10-11.

101) Ibid. pp. 10, 11. それは、組合組織に、中央組織に、全面的に経営者組織にとって代わって、原料、製造品の購入と交換、労働の評価と報酬、個人的、集団的、地方的、全国的、国際的生活に必要なすべてのものの分配の複雑で難しい操作を果たすという課題を割り振る。Ibid. pp. 11-12. その上で、これは全く現実的ではないと批判する。

102) Cf. Ibid. p. 12.

ことを望む所有のありかたである。ポジティヴィストは所有は個人的に止まるべきである宣言する。というのは、それはイニシャチヴ、エネルギー、独立の源泉であるから。我々にとって富の使用はその所有よりも重要である」と。また、「コミュニストによってと同様にポジティヴィストによって本質的とみなされた個人の独立、自由はマルキストのやり方では確保されえない。それは極めて強力な国家官僚の絶えざる専制的介入によってしか全ての人々の協力を確保しえない」¹⁰³⁾と。「社会主義」の将来を予言したようにも読める。それは置くとしても、国家介入への拒絶とも言うべき態度は、「社会主義」以降の改良主義とも決定的に異なる点として注目すべきである。

今一つの、両者に対する批判は、目的を達成するための方法に関するものであった。すでに、変革の過程がとくに教育による長期のものであるとされていることに、革命主義への批判があった。ここでは、次の2点を指摘するにとどめる。まず、労働者の国際的連帯の進展と、国際的ゼネストの可能性を指摘した上で、次のように言う。「しかしながら、暴力革命の支持者の希望にもかかわらず、この計り知れない広がりを持つストライキは新しい社会の到来には至らない。それは、ただ、プロレタリアに改良をもらしうるだけであり、この力を用いる諸条件によっては、経営者と同様に、プロレタリアもまた極めて大きな打撃を受け、癒しがたい大惨事が引き起こされる」と。さらに、スピーチの末尾において、次のように言う。「苦しんでいる人々、無慈悲な資本家の悪習、政治体制によって冒される不正の犠牲者の正当な苛立ちを前に、社会状態の変革のための、様々な試みが、革命的形態でなされることを予見しても向う見ずではない。しかし、それらは災厄を招くものであり、問題を解決しない。改善や、改造は

103) Ibid. p. 12.

むしろ連続的に、道徳的進歩と文明化に応じてしか実現されないのである」¹⁰⁴⁾と。

したがって、変革の方法に関して言えば、プロレタリア・ポジティヴィスムと、クフェルが「革命主義」と呼ぶものとは、決定的に立場を異にしている。ただし、クフェルがスピーチをしている1914年時点では、1906年アミアン大会での妥協、さらには、革命的労働組合主義の頭目とみなされたV.グリフェールからL.ジュオーへの指導権の移動、後者が革命主義は掲げながらも現実主義的な改良を受け入れたことによって、両者の距離は見かけほどではなかった。むしろ、クフェルの改良主義的主張が浸透していたと言ってよい。

それを踏まえ、あらためてここで、変革の内容に関する両者の共通点、対立点をその距離を念頭に、確認しておこう。本稿での、これまでの検討からすると、まず、過去と現在の富の生産者としての労働者、にもかかわらず彼らとその富から疎外されているとする認識、そして、「救世主としての労働者」という変革の主体としての労働者の自覚、このプロレタリア・ポジティヴィスムの核心は、「革命主義」、あるいは Kommunismus と通じ合うものがあったと言える。派生的にも、議会主義は否定しないまでも、国家介入への拒絶とも言うべき態度は、自助努力を根拠としている点は見落とせないとしても、共通した感覚によるものとみなすべきであろう。また、批評活動に見られるエリート主義にも、自覚した少数者による革命主義的組合運動の指導と似通うものを見ることができる。反知識主義的傾向と徹底した「教育」重視、両性の平等と保守的性別役割分担の主張は、決定的に異なるように見える。しかし、これらの点に結論的に述べるためには、「革命主義」そのものの再検討が欠かせない。今後の課題とし

104) Ibid. pp. 17, 21. クフェルは一般に、ストライキが惨禍をもたらすとし、それを避けるための仲裁の必要性を強調する。Ibid. p. 17.

たい。暫定的結論としては、両者の根本的相違は、フランス革命の伝統への態度にあり、プロレタリア・ポジティヴィスムがこの伝統を否定するところに、少数派に止まらざるをえなかった最大の要因がある。また、CGTが現実主義的路線に転換しながらも革命主義を掲げたこと、イギリス、ドイツ、さらにはアメリカの労働組合運動とフランスのその相違の原因もここにあると言ってよい。

おわりに

M.アルメルは、ポジティヴィスムを「時代遅れの理念」とし、クフェルが労働者の組織をそれに従属させたとした。本稿で見たように、プロレタリア・ポジティヴィスムは性別役割分担、労使のコラボレーション的あり方への憧憬など保守的、復古主義的要素を含んでいたことは否定しえない。その点は、レベリューによる、伝統的な労働者のあり方とポジティヴィスムの結合という指摘とも合致する。しかし、当時の革命主義の中にも保守主義が存在した可能性があり、より広く、当時の思想状況とかかわらせた検討が必要である。また、リオションはクフェルの組合活動とプロレタリア・ポジティヴィスムを切り離したが、クフェルにおいては、それは強く結びつけられていた。次稿においてこの点を念頭に置きながら、A.クフェルの書籍労連におけるイニシヤチヴ掌握の過程を検討する。

